

OHAT 導入による口腔内アセスメント向上への取り組み

HCU 病棟 ○伊東勇人 白石一貴 池田光臣 山崎美穂 草場昂 兵道真由美

【目的】

A 病院高度治療室（以下、HCU とする）は一般急性期病棟と比較して人工呼吸器装着患者、高度脳卒中患者が多く入室されている。また、昨今の少子高齢化の影響もあり入院患者の大多数が後期高齢者であり、嚥下機能の低下した患者も多い。そのため、意識障害や嚥下障害のリスクが高い傾向にある。しかし、人工呼吸器装着患者や嚥下障害のある患者に対し、口腔内アセスメントが適正に行えていないため、患者の状態に応じた口腔ケアが行えていない現状がある。口腔ケアの必要性は認識しており 1 日 3 回の口腔ケアは行えているものの、事前の口腔内アセスメントできていない。アセスメントの方法が明確ではないことや、看護師の口腔ケアに対する意識が不十分であることが原因と考える。そのため、OHAT を導入し口腔内環境のアセスメントを行い看護師の意識向上に向けた取り組みを行った。

Oral Health Assessment Tool (OHAT)は、要介護高齢者の口腔問題を評価するために、オーストラリアの歯科医師 Chalmers らによって開発、報告されたアセスメントシートである。評価項目は、口唇、舌、歯肉・粘膜、残滓、義歯、口腔清掃、歯痛の 8 項目であり、それらの項目が健全から病的までの 3 段階に分けられている。OHAT の特徴は、粘膜の清掃状態だけではなく、義歯の使用状況や破折の有無、齧歯本数など咀嚼に関連する項目が含まれていることである。Chalmers らによって、信頼性と妥当性が示され、松尾らによって、日本語版 OHAT の信頼性と妥当性も報告されている。

【対象】

HCU で勤務する看護師 12 名（師長と研究メンバー除く）

【方法】

HCU 看護師に対し、口腔ケアに関する事前アンケート行い、口腔ケアに対する意識調査を実施する。口腔清掃の自立度判定基準（BRD 指標）と OHAT を使用したアセスメント方法、口腔ケア手技をスタッフ全員へ伝達する。HCU に入室した患者へ OHAT を使用し、2023 年 7 月～11 月まで評価を行う。期間終了後、HCU 看護師へ事後アンケートを実施した。

【結果】

1. データ件数：事前アンケート総数 12 件 事後アンケート総数 10 件
2. データ推移：事前アンケート結果より、看護ケアとして口腔ケアに対する関心や重要性を重視している一方で、口腔ケア評価への認知が 0%であった。口腔ケアの手技に対する不安が強く、業務負担に感じるスタッフも多く見られた。BRD 指標を基準とした OHAT による評価を導入したところ、事後のアンケート結果より、口腔ケアへの関心が高まり、口腔ケアへの負担の軽減、手技に対する不安の軽減を認めた。

【考察】

研究以前の口腔ケアはスタッフの能力・知識に依存していた。今回、指標となるアセスメントツール OHAT を導入したことで、口腔内評価の数値化やアセスメント内容、手技を明確にできたと考える。事後アンケートから口腔ケアへの関心が高まったこと、口腔ケアを負担に感じるスタッフの割合が減少したことは、口腔ケアへの理解や重要性が得られたと考えられ、意識の向上につながったと考える。

研究以前では、スタッフの主観での評価となっていた。OHAT を導入することで視覚的評価に加えて数値化することができるようになり共通認識を行いやすくなったと考える。スタッフの能力にかかわらず一定の評価ができるため、今後の課題として、OHAT を定着させることで HCU での口腔ケアの質向上に加え、急性期一般病棟でも OHAT を定着させる仕組みづくりが必要だと考える。